

そこで筆者は、この「敍意一百韻」を複数回に分けて、前者の分析方法である「字句」そのものに込められている中国古典籍からの投影の指摘を主眼に注釈を進めて来た。(註2)

このことを踏まえて今回、改めて本詩に採られている出典の分析及び、全体の構成・全編に流れる詩情等の分析を試み、更に深層に秘められているものを探りたいと思う。

一一

まず、この作品を字句の考察を主眼に読み解き、改めてこの作品の構成を考察してみると、十句毎の二十段落で、構築されているという結論に達した。以下、そのことを一段落ずつ例示して行きたい。

この二〇〇句全篇は、京から突如太宰の地への左遷が決行された二月から、この詩の制作されたと想定される秋の九月まで、季節で言うと、春・夏・秋の道真自身が目にした実景を通し、それを基軸として、時折々の心象風景を、糸をつむぐように織り込んでいく句作りがなされているように思える。そこには中国の古典籍を効果的に織り込みながら詩空間を拡げつつ緻密な構想のもとで句作りがなされており、決して感情のおもむくまま激情を紙に書きなぐったような類の作品ではない事を以下に実証してみる。

【一段】

この冒頭十句では、太宰府左遷が決行された事情・事態が説明されている。この段は一九一句から二〇〇句の